

加藤晴明先生とのフィールドワーク

寺 岡 伸 悟

■はじめに

加藤晴明先生とは、2008年から約10年の間、奄美群島を中心としたメディアと地域文化のフィールドワークを共にさせていただいた。日本社会学会の大会の控室で、それまで直接お会いしたことのなかった加藤先生の隣に偶然座ったことが「始まり」である。話はメディア研究全般からやがて沖縄におけるメディア文化の話題になり、先生は奄美の親子ラジオの話をしてくださった。当時の私は、沖縄や奄美の音楽が好きという程度で、奄美は沖縄とは異なる文化があるという程度の知識しかなかった。親子ラジオというメディアすら聞いたこともなかった。奄美は沖縄ほど大きくはなく、島嶼地域ということで範囲も明確だ。文化的な独自性もある。「奄美で調査してみようか」。加藤先生のお誘いに、私は一瞬でとりつかれた。メディア研究の専門家と一緒に地域に入られることは、私にとってとてつもない魅力に思われた。加藤先生はそれから何ヶ月もしないうちに奄美のメディア調査に関する計画書を書き上げ、民間の研究助成を獲得してくださった。そのおかげで早速奄美に足を運ぶことができたのである。

加藤先生がたてられた研究計画は当初から野心的だった。従来加藤先生が行われてきたコミュニティラジオなどの音声メディアにとどまらず、新聞や雑誌などの活字メディア、映像メディア、音楽事業など、すべての種類のメディア事業体を対象にする。さらに地域メディアだけでなく、奄美に支所をおく全国メディアとの関連も含めたそれらすべての付置連関を、〈地域メディアの総過程〉として悉皆調査しよう、というものであった。

さらにその枠組みはメディアの総過程と奄美の地域、文化生成の相互作用という、より広い問題意識に根ざしたものとなっていた。

■フィールドワーカーとしての加藤先生

飛行機の関係上、愛知から一足先に奄美に到着される加藤先生は、少し遅れて関西から到着する飛行機でやってくる私を、奄美空港の到着ゲートでいつも待ち受けてくださる。「よっ、お疲れさん」。その言葉と笑顔に出会えば、いよいよ数日間にわたるフィールド調査の始まりだ。こうした風景が年に2回以上、10年ほども続けられた。

一般に、共同でフィールドワークを行うことは意外に難しいものである。日程調整ひとつにとってもそうであるし、調査方針、役割分担、資料解釈、成果発表の方法など、齟齬が生じそうなポイントはたくさんある。しかし、加藤先生との共同調査ではこのような齟齬はほとんど生じることはなく、逆に共同フィールドワークの恩恵をたくさん受けることができた。

ひとつのインタビューが終わった後、訪問先から帰りのレンタカーのなかで、先ほどの経験についてすぐに事実確認や感想を語り合える。一つのインタビューやイベントの視察から得られる知見、認識が単独調査の場合よりはるかに深く広くなる、とても貴重な時間だった。そうした経験を何十回も繰り返すことができ、そのなかで奄美文化や地域メディアの総過程という考え方がどんどん豊かになっていったことが思い出される。

加藤先生は、自分は生粋のフィールドワーカーではない、と謙遜しておられた。しかし先生のワークの進め方から、私は大いに反省し、学ばせていただいた。以下にそのうちのいくつかを書いてみたい。

まず第一に、加藤先生は決して市役所など公的機関の訪問からフィールドに入ろうとはされなかった。まず民間の人と出会うところからはじめ、しばしば食事をともにし、面会を重ねることで信頼感を得ていく。やがてその方に新たな話者を紹介してもらおう。こうした方法で、何年もの時間をかけ少しずつその地域に関する経験値をあげていく手法をとられた。

私の場合、大学教員となった後は、自治体史の執筆委員などを担当した影響もあって、調査対象地にはまず地元の役所から入っていくことが多かった。自治体から調査地に入れば、その地域の概要や統計資料なども簡単に手に入れることができる。役所から訪問先を紹介してもらえれば、相手の信頼も得やすい（あるいは断りにくくなる）。こうした調査する側（自分）の都合を優先して行う調査にさほど疑問を抱かなくなっていた。

しかしそうしたやり方では、行政寄りの見方が先入観となる懸念がある。「そろそろ役所に行かないでいいんですか（行ったほうが楽じゃないですか）」と、ときおり誘う私に、加藤先生は「行政関係はできるだけ後回しにしよう」と何度もおっしゃり、こつこつと民間の人たちとの面談を積み重ねていかれた。結局、共同調査が始まって3年ほどたった頃、ようやく市役所にインタビューに赴いた。インタビューが終わって市役所からの帰り道、「だいぶ様子もわかってきたので、もうそろそろ役所に行ってもいいかなと思ったんだよ」とおっしゃった言葉を印象深く覚えている。研究対象の意味世界を、生活者の視点からできるかぎり先入観なく、かつ多元的に知ろうとされるその姿勢と忍耐力に、「調査ズレ」しかけていた自分を強く反省したことが思い出される。

第二は、大半の人に、数ヶ月以上の時間をおいて二度以上訪問インタビューをされたことである。私も、キーパーソンに当たる人の場合には、繰り返し訪問して話を聞くことはある。しかし奄美調査において加藤先生は、半年ほどをおいて同じ話者を再訪問することを心がけておられた。調査地での限られた滞在時間、できるだけ初対面の人に会って新規な情報を得たいという欲求を抑えることは簡単ではない。しかし加藤先生は腰を据えた調査姿勢を貫かれた。「僕たちは（専任教員の職も得ていて：引用者補足）もう業績づくりにあくせくする必要もないんだから」、としばしば私を諭すように話され、見聞したことを再確認したり深めたりすることをなにより優先された。たしかに、初対面の際には緊張感が見えた話者の方も、再訪の際には懐かしそうな面もちで私たちを迎えてくださる。私たち

が知りたいことを初回の訪問で理解しているので、貴重な情報を提供いただけるともあった。「こうしてまた来るってことが大事なんだよ」、「ただ研究上知りたいことだけを聞いて帰ってしまうだけじゃだめなんだよ」と、再訪問の帰り道に加藤先生がおっしゃったことを覚えている。そこには、論文を書くためだけに地域を調べるという姿勢への批判が感じられた。

キーパーソンにあたる人たちに対しては、共同調査が行われた10年ほどの間に何度も訪問し、ときに食事を共にして語り合い、意見交換をされた。若者だったある話者はやがて白髪まじりの壮年となり、共同調査の後半には一緒に年を重ねてきたような感慨がそうした話者たちとの間に共有されるようになった。加藤先生は、こうした奄美とのつきあいを、私との共同調査終了後も現在まで続けておられる。

第三は、自らの研究知見を積極的に提供するインタラクティブなインタビューである。

奄美調査以前に、すでに加藤先生は全国のコミュニティ放送局の訪問調査を行っておられ、そうした事例をたくさん知っておられた。奄美で地域メディア事業者にインタビューする際には、そうした経験や学術的知見を積極的に語って提供された。私は当時、どちらかといえば古風な調査者態度をもっており、できるだけ聞き役に徹して話者の語りに影響を与えないことばかりに気を遣っていた。そのため、奄美調査の初期は、加藤先生がどんどん自分の意見をインタビュー相手に述べられることが少し不安に思えたこともある。

しかし、加藤先生の知識提供やアドバイスはインタビュー相手にとって有益なものとして受け取られた。そしてそれが先生への信頼感を育くむ様子が見て取れた。こうしたアクティブなインタビューはときに非常に評価の難しいものである。しかし私が思っていたような「純粋な聞き手（客観的なインタビュー調査）」など存在しないこともまた明らかであろう。加藤先生は「メディア研究者」という自分の立場を相手にも明確に提示し、ぶれない調査姿勢・研究態度を貫かれたと思う。

■コンセプトメイカーとして

「社会学はコンセプトメイキングを行う学問だから…」。共同調査の際、何度か耳にした加藤先生の言葉である。「コンセプトメイキング」という言葉の「メイキング」の部分を重視する加藤先生は、奄美でも、既存の社会学理論を持ち出し、そこに奄美の現実を当てはめるようなことはされなかった。資料の収集・整理、インタビュー録音の聞き直しや文字起こしを非常に丁寧にされながら、コンセプトメイキングを目指しておられることは、共同研究期間中、つねに感じられた。

加藤先生は若い頃、市民運動の研究にも加わっておられたという。その頃の論文には法制度、社会運動などへの言及も見られる。しかし、加藤先生は「個人」「自己」の次元から説得的に組み上がっていくような理論化をつねに目指しておられる。中京大学の同じ学部には在職されていた理論社会学者の片桐雅隆先生との議論が大きな刺激になった、と、よく感謝を込めて私に語ってくださった。2012年に出版された『自己メディアの社会学』は、そうした成果の集大成であり、加藤社会学の中心となる作品だと私は考える（加藤 2012）。そうした研究を土台として、メディアと地域と文化の関係に取り組みされた奄美の研究があり、そのことが、〈人々の生（ライフ）と地域文化のダイナミズム〉という、従来の地域研究ではうまく表現することのできなかった側面を実証的にも理論的にもしっかり記述することを可能にしたように思える。

それを象徴するようなフレーズの一つが「自文化の自分化」である。これは加藤先生からいただいた「地域メディア論」の授業資料で強調されていた言葉である。スマホ、SNSなどの個人メディアにどっぷりと浸っている若い学生たちにとって、地域や地域文化は、なんとなく縁遠い言葉に感じられるものだ。しかし、先生のこのフレーズは、私の学生たちにも共感を得た。授業後の学生コメントでは、早速何人かがこの言葉を用いて授業の感想を書いていた。

加藤先生は早い時期から、地域に関してこうした視点をもっておられ

た。1997年に出された論文に、すでに次のような記述がある。

「(略) 地域が情報化するのではなく、“地域”それ自体が情報の存在となるのである。今日では、都市・地域・自治体という存在それ自体が、ひとびとの生活感覚のなかで、ひとつの限定的に構築された情報の現実＝擬制性 (artificialness) として立ち現れてくるという<現実構成の根本的な変化>が進んでいる。このような歴史認識から、本稿では地域の実体性を所与のものとするような地域論を離れ、地域という“現実”を、多元的・多重的に捉えるフレーム (メディア・フレーム) の必要を提起する。」(加藤 1997:92-93)。

この仮説を理論的に発展させる場所が奄美調査であり、その過程に付き合わせていただけたことは、私の大きな経験財産である。

■おわりに

2017年、『奄美文化の近現代史－生成・発展の地域メディア学－』(南房新社)がまとめられ、私との共同調査は終止符をうった。

この本の「著者あとがき」に、私は、この本が奄美空港の売店の書籍コーナーに、奄美みやげと一緒に並ぶことが夢だ、と書き記した。あえてさらりと書いたのだが、これこそ私がかもっとも願った研究成果の還元のかたちだった。出版後しばらくして、奄美に単独調査に行かれた加藤先生から一通のメールが届いた。そこには奄美空港の売店にこの本が並べられている写真が添付されていた。願いが叶ったうれしさと、それを伝えてくださった加藤先生の優しさに目頭が熱くなった。

加藤先生はその後も奄美調査を継続されている。ときおり送ってくださる論文では、奄美の地域文化に関する貴重な情報が整理されている。また、さらなる理論仮説の提示も含まれている。奄美研究の次作の出版も予定されているとうかがった。大学での役職もご多忙のなか、こうした研究を積み重ねられる姿勢に尊敬の念を抱く。

最後になったが、加藤先生のご退職にあたって、執筆の機会を与えてく

ださった加藤先生はじめ中京大学現代社会学部の先生方に心より感謝いたします。貴大学・貴学部のみますますのご発展をお祈り申し上げます。そして加藤先生、ひとまずお疲れさまでした。これまでの学恩に感謝するとともに、先生のご健康と、益々のご活躍をお祈り申し上げます。

■引用文献

加藤晴明（1997）「情動的現実としての“地域”－メディア・フレームと多層的・多重的地域イメージ」『社会と情報』第2号、東信堂、pp.92-110.

加藤晴明（2012）『自己メディアの社会学』リベルタ出版

加藤晴明・寺岡伸悟（2017）『奄美文化の近現代史－生成・発展の地域メディア学－』南方新社